

化石の生き残りと呼ばれるトンボ界の貴重種・ムカシトンボは、ただヒマラヤと日本に限り棲息する。昆虫学生物学上きわめて興味深い貴重種であるのは、ここにことさらに述べる必要のないほど有名である。

このムカシトンボがじつは札幌市内、円山公園の電車終点から徒歩三、四十分のところに、かなりの数が棲息していたのである。これほど市街に近い産地は他に比類を見ないので、われわれは秘かに誇りとしていた。

ところが五年ほど前、僅か二年の間に完全に絶滅してしまつたのである。

札幌市区域内に、なお現在数箇所産地が知れており、ぜひ保護保存を計りたいので、この絶滅記録を参考資料の一端に書き残しておこうと思う。

その場所は、札幌市琴似町宮の森一二三番地というのが正式の所書きだが、これでは一般には通じない。現在の状況でいうと、円山終点で電車からマイクロボス小別沢分岐点行きに乗り替える。六、七分で小別沢分岐点に着くが、この停留所のすぐそばの溪流が現場である。

筆者は北大医学部定年退職を目前にしてここを隠棲の地と定めて山鼻から家を移築

したのである。当時はやぶの中で趣味の虫集めに好適であり、また紀元二六〇〇年、冬季オリンピックイードを予期して、わが国最初のボブスレー水路を作り競技が行なわれたところで、故・柳教授が協会々長、私は副会長という因縁があつた。

五月半ばのある日、通勤途上の私は、おりからの強風に飛びなやむ一匹のトンボを手づかみにした。一見してこれがムカシト

ヤブソテツの葉柄で羽化したムカシトンボ

1961年5月24日、午前11時札幌市宮の森1235番附近の12軒沢にて撮影。この年以後、ムカシトンボは絶滅した。



ムカシトンボ絶滅記

ンボであることを知り、飛びあがつてよろこんだ。

以来暇あるごとに、家のそばを流れる小溪流を丈なす草を漕り、このトンボを捜し求めた。蚊やぶとに苦しめられる意外大した苦心もなく、貴重なトンボの親も子も採集、また若干の写真も撮影し得た。

この溪流には、十二軒沢という古い名がある。本流は磐溪峠の東につらなる丘陵に

発し、磐溪峠からくる枝流を合する。両方とも各一軒の農家の近くを流れ、その附近にはムカシトンボは棲息しない。現在のバス停留所附近では流れはほとんど直進しているが、じつは道路を新設するために曲折を切り通して直進とし、道路下をコンクリート管で通り抜けるようにしたのである。

この溪流に温泉が出るはずだとボーリングがはじまり、宮の森観光温泉ホテルというものの建築もはじまつた。ボーリングは不成功に終わり、川の水をわかつて間に合わせていたようだ。前に書いたこの沢の強いU字形の屈曲部の岸にかなり多量の湧泉があり、この清い水がムカシトンボの命をつないでいた。

「温泉」の落水が川の水を汚染しはじめると、間もなく河床は水綿におおわれはじめ、さらに新道の工事で流れが湧泉から隔

離され、湧泉は新道路下に埋没されてしまつた。これがムカシトンボの命とりなつた。これは一匹も見ない。私はムカシトンボのほかに、この流れに棲むモイワサナエの生熊に手を染めていたのだが、このトンボも、ムカシトンボと運命をとみにしたようだ。

田や畑の害虫どもは、あれほど手をつくしても絶滅できないのに、これ等はまつたくはかない命だつた。

トンボの絶滅につけ足しておきたのは、ユースホステルの南に湧泉を源とする小池があつたが、これも埋められてしまつた。この池にはオゼイトトンボ、北海道では非常に稀れたコヤマトンボなどが発生していたが、惜しいことをした。

教育大学の電車通りからさらに西に藻岩山下に進むと、墓地に上がる急な石段につき当る。その右側に、養魚池釣堀りの残りの池があつた。ここに、北海道では稀れなキトンボという美しい燈赤の羽根をもつアカトンボ類の一種がたくさん発生していたが、この池も埋められてはこれも滅亡である。惜しい。

(全日写連道本部)